

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	細川藩の除墨帳：社会復帰のための施策を取り入れた『 刑法草書』（いれずみ物語；9）
Author(s)	小野，友道
Citation	大塚薬報 = Otsukayakuho, 620: 67-69
Issue date	2006-11-10
Type	Journal Article
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/3896">http://hdl.handle.net/2298/3896</a>
Right	



# いれずみ物語

— 9 —

小野 友道

## 細川藩の除墨帳

— 社会復帰のための施策を取り入れた『刑法草書』 —

戦国時代は残虐な刑が行われていた。軽い犯罪に対しても耳そぎ、鼻そぎ、そして磔・火あぶり・鋸引きなど死刑もしばしばであった。しかし、関ヶ原の戦いも終わり、慶長8年（1603）徳川家康が征夷大將軍に任命され、社会も安定してくると、儒教の精神が刑罰にも反映してきた。「お上のお慈悲じゃ」というわけで穏便な刑罰の風潮が現れ、追放例が多くなってきた。享保の改革で完成した「御定書百ヶ条」にその傾向がはっきりと認められ、「耳鼻をそぎ候科のものより一等軽き品の中は向後腕に廻し幅三分程づつ二筋入墨致し候」と墨刑への転換もある。追放刑が増えると入墨が必要となるのは必然だったのかもしれない。入墨を見ると、どこからの流れ者か一目瞭然というわけである。

入墨は黥刑の名で古代からあったが、鎌倉時代に焼金を額に当てる火印の刑がこれに取って代わり、一旦消えた。しかし、徳川時代にそれが復活した。江戸の刑法には重罪と軽罪があり、軽罪の正刑に払、敲、入墨、追放の4刑があった。入墨は正刑としても科せられるが、その多くは追放や敲の付加刑の場合が多かったという。

入墨をされて世間に放たれても、渡世は簡単ではない。誰でも前科者の証である入墨を消し

たくなろうというものである。明和元年（1764）の触書に「入墨御仕置に成候以後 商等いたし候障に可相成と存 右之入墨を焼消候者 如元入墨之上江戸拂之御仕置申付候儀、向後御定同様に相心得可被伺事」とあり、入墨を消した者が少なくないことがうかがわれる。入墨を消してやった方も敲に処せられた。また、入墨をした前科者が人足寄場から逃げ出すと、今度はさらに1本入墨をされ、それは増入墨と呼ばれた。

白石一郎の小説に、隠岐島の流人音吉が、通天橋の洞穴の下で、男女抱き合って横たわっていた小舟を見つけたことから始まる物語がある。「入墨 孤島物語 第5話」がそれである。

「その左腕を見て音吉は息を飲んだ。腕の肘の上に幅三分ぐらいの入墨が二筋、並んで彫られてあるのが見えたのである。＜流罪人だ＞と音吉は思わず自分も左腕の袖をめくった。音吉の入墨は引き回しといって腕に輪を書くように彫られてある。小舟の男のそれは短冊形の入墨が二つ並んで彫ってあった」、音吉と小舟の男亀二郎は故あって、舟で隠岐島を逃げ出す。

「くもしわしらがぶじに本土へ着いたら、真っ先にすることがある。もっとも舟がひっくり返ればそれまでだが」 ＜何だ＞と亀二郎が聞





細川藩の除墨帳  
(熊本大学附属図書館所蔵)

いた。＜入墨を焼き消すことだ。本土へ着いても入墨が目立っては何もできねえ。お前入墨はわしが焼きつぶしてやる。わしのやつは頼む＞＜どうするんで＞＜焼火箸でお互いの入墨を焼きつぶそうじゃないか＞

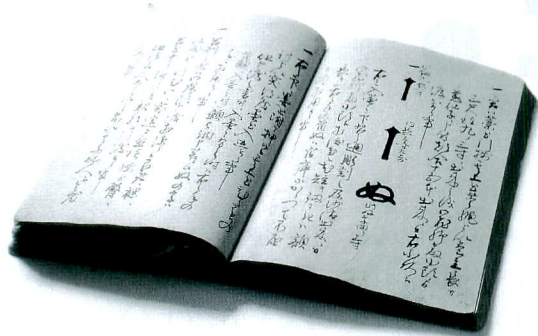
\*

一方で、肥後細川藩では入墨をされた者がその後改心し、生業について5年間善良な暮らしをしていれば、村役たちの申出書により入墨を除いていた。このような記録が、永青文庫（肥後細川家に伝わる美術品や古文書を収集している財団）に保存されている『除墨帳』に残されている。たとえば芦原村和助の場合、「右和助儀、不届之筋御座候て、去ル戌ノ十一月廿九日、入墨咎百たき之御刑法被 仰付、以来屹ト心底引改相慎候様ニ…五ヶ年ニ相成申候ニ付、此段覚書を以申上候、以上」とあり、同村庄屋 次郎助など芦原村五人組の名で、御刑法方 御奉行衆中へ、本人の「除墨願」の書状とともに届けられた。これを受けて御刑法 御奉行中から御郡代衆中へ、「…其後行跡相改候段奇特之儀ニ付、右入墨此節被除下候條、以来弥以相慎候様ニ可有御達候、已上」と除墨の許可が下りている。しかし、中にはそれを待たずに自分で入墨を消す不届き者もいた。『口上』に「入墨拔取候次第 御吟味被御付候 此儀、私儀、去年三月後妻呼込可申咎ニ而、入墨有之候而者、被

嫌可申と存付、不相済儀と者心付候得共、拔取可申ト存、丹礬膏葉を入墨之上ニ付置候処、日数十日計もいたし拔取候事 古保里村勘左衛門 37 歳」とある。後妻を娶るために勝手に入墨を「丹礬膏葉」で消したのである。丹礬とは何か。胆礬とも書き、硫酸銅を多く含む鉱石である。これを含む軟膏を擦り付けたのであろう。入墨を消したこの男、吟味の結果、元の通り額に入墨され、咎 100 の上、雑戸へ身分を落とされた。同じ史料の他の者は、「御印（入墨：著者注）之上を針ニ而突、丹礬ヲ摺付候処、十日振計ニ額之御印者 全脱落、腕之方も者半分計相残候得共、額程二者目立不申、其上丹礬之喰拔候迄、不怪苦痛いたし候間、腕之方も其假ニいたし置候事」とあり、入墨に針で傷つけ、そこに丹礬を擦り付けている。額の入墨は消せたが、腕のは残った。しかし、痛いのでそのままにしたというのだ。丹礬は、シーボルトの治療薬集を門人が出版したという「蘭方口伝（シーボルト驗方録）」の中にも丹礬精として、防腐剤の分類のなかに挙がっている。あるいは細川藩の除墨の方法もこの丹礬であった可能性が強いが、定かではない。おそらく、丹礬の除墨効果は、硫酸銅による一種の腐食効果、化学熱傷を起こさせるものであろう。

『除墨帳』は宝暦 5 年（1755）から天明 9 年（1789）までの入墨と、寛政 7 年（1795）から明治 3 年（1870）までの除墨の記録である。ちなみに、当大学川口恭子客員教授の調査では、宝暦 5 年、44 名に墨刑がなされている。

なお入墨の具体的方法については、肥後藩が作成した有名な『刑法草書』の施行細則を定めた『御刑法定式』にある。右頁上（写真左）に示すような入墨がなされるが、その説明に「一 ↑ 此釵先長一寸 ↑ 同長壹寸九歩 ん 此ぬ字曲り三寸 右者入墨之印、右之通彫刻之及沙汰 出来ニ付 御飛脚番小頭江相渡置候 尤短キ釵さきハ額 長キハ右之手の首 んハ官庫にかかって不届ものニ相用せ候事、一 右之印ニ墨を附ケ押候て、其上をひたもの針を以突得渡墨を入込せ候事 但 申渡之書付ニ入墨と



入墨の具体的方法 『刑法草書』の施行細則を定めた『御刑法式』（熊本大学附属図書館所蔵）

有之時ハ右之手之首、額ニ入墨之時ハ額と調申  
答ニ候 ぬの字ハ手ニ相用せ候事」とあり、具  
体的である。

安政3年には、肥後勤王党総帥宮部鼎蔵の弟  
大輔（春蔵）らが、兼ねてから確執のあった永  
原岩熊らと若者同士の喧嘩に巻き込まれた。軽  
輩の身で士籍の永原に無礼を働いたとして、一  
人は打ち首となり、大輔は、苗字と刀大小を取  
上げ、額（額）に入墨 答百叩きとされたとい  
う記録が、永青文庫の『誅伐帳』に残されてい  
る。世に「水前寺事件」と呼ばれている。大輔  
が後に除墨されたか否か確かめ得なかったが、  
除墨の制度はまさしく肥後藩の『刑法草書』の  
精神に則ったものである。当時の藩主細川重賢  
は宝暦の改革に取り組んだが、その一つが『刑  
法草書』の編纂であった。その特徴は幕府の  
『公事方御定書』にある追放刑をやめ、徒刑を  
採用したことにある。それは日本における近代  
的自由刑の嚆矢であり、その他の藩へも影響を  
与え、また明治新政府最初の刑法典の見本とも  
なったのである。

\*

さて、『魏志倭人伝』に「黥面文身」が出て  
くるのは有名であるが、これが書かれた3世紀  
の中国では、いれずみはすでに刑罰の一種であ  
った。それで編者陳壽にとって倭人のそれは驚  
きであったのである。すなわち漢人はいれずみ  
を刑罰とし、それは周の時代に遡る。周代以前  
にいれずみは広く中国に分布していたが、周の  
ある段階で支配層がそれを刑罰にした。その後

漢代まで黥刑としてのいれずみは存在したが、  
漢の文帝の時になくなった。ちなみに、『除墨  
帳』の冒頭に「…清律之内ニ別紙書抜之通相  
見、彼方ニても追て刺墨を除候法相立チ居申  
候、乍然其仕法ニ於て清律之趣、此方ニては相  
當仕間敷哉…」とあり、中国・清の法律の影響  
が、除墨に与えたことが明記されている。

さて、江戸では入墨の前科者として信用を得  
られずやけくそになり、悪事を重ねたり、かえ  
って入墨をひけらかし恐喝する者も現れた。さ  
らに入墨を隠すために新たにいれずみ（彫り物）  
をする者が現れ、それは「入墨入れ直し者」と  
呼ばれた（井出英雄）。このようなこともあつ  
てか、明治3年9月25日、法令により墨刑は廃  
止され、さらに12月2日、全国各府藩県に頒  
布された刑法典『新律綱領』により正式にその  
歴史に終止符が打たれた。

『刑法草書』『除墨帳』など多くの御教示をいただいた当  
大学教授山中 至氏、当大学客員教授川口恭子氏ならびに  
熊本日日新聞社編集委員井上智重氏に深謝いたします。

（熊本大学 理事・副学長）

## 主要文献

- 1) 井出英雄：『やくざ学入門』、北明書房、1969。
- 2) 鎌田 浩：『肥後藩の庶民事件録 日本近代自由刑の誕  
生』、熊日新書、2000。
- 3) 澤田撫松：『変態刑罰史 全』、文藝資料研究会、1926。
- 4) 設楽博巳：『三国志がみた倭人たち』、山川出版社、2001。
- 5) 白石一郎：入墨 孤島物語 第5話（隠岐島）、小説新潮、  
48 (2) ; 1994。
- 6) 玉林晴朗：『文身百姿』、文川堂書房、1936。
- 7) 水野 祐：『評釈 魏志倭人伝』、雄山閣出版、1987。
- 8) <http://www.ph.nagasaki-u.ac.jp/history/2/18dou.html>
- 9) 山本芳美：『イレズミの世界』、河出書房新社、2005。